

英國の子供小説

オリヴァー・ツイスト

永代美が代

オリヴァー・ツイストはザックケンスの作である。ザックケンスはイギリスの名高い物語作者で、ちやうど日本の少年少女が藤谷小波先生を有難がるやうに、西洋の少年少女はザックケンスを崇拜して、その作を喜んで讀む。一體、氏の作には少年少女を主題にしたものが多いたが、英語のよく讀めるものでも、氏の作を見ると、一寸オヤオヤと驚く位、長篇なのである。わたしはそのうちのオリヴァー・ツイスト物語を縮めて紹介しようと思ふ。

すつと前、英國の貧民達が非常に虐待されて、憐れな境遇に沈んで居た頃のことである。とりわけ甚い裏長屋に、一人の孤兒があつた。母親は何處から流浪して來たか、誰もその身の上を知る者はなかつた。可哀さうに母親は、その愛



兒に最初のキスを與へると殆んど同時にみまかつた。

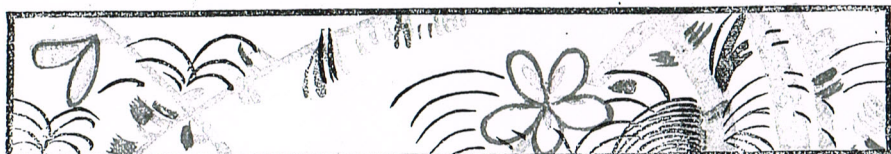
そこで孤兒は、教區の費用で育てられる事になり、オリヴァー・ツイストと命名されて、マン夫人といふ婦人の許に預けられた。とても育ちさうにも思はれないほど弱くつて、蒼ぶくれてゐたが、氣質がよくて、育て方一つでは行末見込みがありさうな子供であつた。

九つの時、オリヴァーは教區の養育院へ移された。教區では九歳以上の子供は養育院に入れて、其處で教育と仕事を教へる定めになつてゐた。最初下役人がマン夫人の許へ迎へに來て、いざ一緒に連れられやうといふ段になると、オリヴァーはついぞ見たこともない下役人と一緒に出懸ける位は平氣であつた。だが、マン夫人が妙な眼色をしてゐるのに氣がつくと、急に悄氣て見せた。ナニ、毎日の辛い、空腹な事を考へ出すだけでも悲しくなつて、オリヴァーはい

つでも上手に、さもなく名残を惜しんで泣くらしく、極めて自然に涙を流すことが出来るのだ。下役人の手前を兼ねて、マン夫人は頻りにオリヴァーを抱きかかめた。そんなことを百遍されたつて嬉しくない、併し養育院へ行つてから、餘りガツガツして居ない用心に、夫人から一切のパンと些しばかりのバタを貰つた時には、オリヴァーは全く嬉しかつた。

途々、下役人は嚴しい顔をして、何も話しかけない、オリヴァーは長い道をさんざ歩き疲れて、やつと大きな建物の養育院へ行き着いた。丁度その夜、役員會があつて、オリヴァーは下役人と一緒に廣間へ出た。そして赤ら顔の怖げな紳士が大勢居並んで居て、いろんな事を訊いた。返事に間諜ついで、オドオドしてゐると、下役人が後からこづく。

『お前は孤兒だね、さうだらう。』
『孤兒つて何ですか。』



『此奴馬鹿だね、孤兒と云ふのは親無しのことだよ。』

オリヴァーは烈しく泣き出した。
『泣いて如何なる！ その代りにお前を養つたり、世話してくれる人達のために、お祈りもあびるが可い！ 馬鹿奴、明日から六時に起きて仕事にかゝるんだぞ。』

オリヴァーは又、石造の冷たさうな大部屋へ連れられて、堅い寢床のなかに寝かされた。

オリヴァーが寝て居る間に、役員會では、經費節減問題が提出された。そして終に、院兒達は今までよりも、もつと粗末な食事をさせられることになつた。翌日から一同は、水のやうな薄いお粥を、定つただけの分量以上食べられなくなつたのである。

赤ら顔の肥つた院長が大きな食堂の正面に坐つて、おかゆ鍋を監督しながら頑張ると、四五人の女達が、定め分量だけ一人々に盛り分

けて、食卓へ運んでくれる。待ち兼ねた一同は直ぐそれを食べた。そして一瀧も餘さぬやうに、後から又お皿をなめた。お皿は光るほど綺麗になつて、殆んど洗ふ世話がなくなる位であつた。

院児はだん／＼瘦せて蒼くなつて来た。一體子供といふものは發育盛りで、食欲の隆なものなのに、年中餓い思ひのしつ／＼けなのだから堪らない。到頭年上の一人はこんなことを云ひ出した。

「俺はもう腹が空つて堪らん、このまゝで居ると、今に俺は、俺の傍に寝かされた子供を食つてしまふかも知れない。」

そこで院児一同の間に會議が開かれた。どうしても院長に迫つて、もつと食物の分量を増して貰はねばならぬと云ふのである。誰がそれを云ひ出すか、皆で籤を引くと、オリヴァーに當つた。

その日の夕飯にも、例によつて子供達は忽ちおかゆをなめ盡した。一同は嘔き初めた。

オリヴァーは終に院長の前へ出なければならなく



なつた。

「院長さん、どうぞも些しおかゆを下さい。」
オリヴァーはお皿と匙を手に持つたまゝ斯う云つた。赤ら顔の院長は眞蒼になつて怒つた。

「何だ！今一逼云つて見ろ！」

オリヴァーが最初の言葉を繰返へすと、院長はいきなり杓子で擲りつけた。

「汝のやうな奴は、此處に置くことは出来ん、今に掲げらまふから、さう思つてゐろ！」

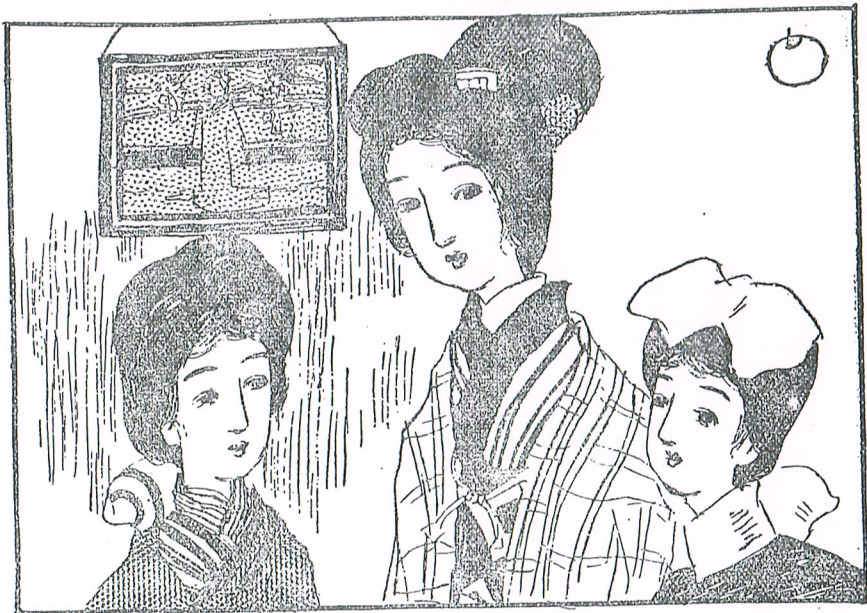
急に役員會議を催した上、養育院の門前には、次ぎのやうな掲示がかけられた。

孤兒オリヴァーツイストを引取るものには、誰にても、年五ポンドの手當を給すべし。

間もなくオリヴァーは、町の棺桶屋に引取られて、その徒弟にされた。少くとも、食べたいだけ食べられる。その點だけは今までの養育院生活よりも増しである。だが矢張り幸福ではなかつた。性惡の相弟子があつて、何ぞと云つては新參のオリヴァーをか

らかつたり、虐めたりして喜んだ。大抵なことは黙つて辛抱する氣のオリヴァーも、或る日、例の意地悪小僧から、死んだ母親の悪口を云はれると、カッとして怒つた。いきなり相手の胸倉をつかんで、力任せに仕事場へ投げつけた。

どうしてそんな大力が出たのだらう、オリヴァーは年上の意地悪小僧と争つて、立派に勝つた自分の力を、今更のやうに驚いた。勿論意地悪小僧は、いくら虐められても黙つて忍んで、ついに言ひ返し一つしたことはないオリヴァーが、斯う手出しをしようとは、思ひも掛けなかつたので



ある。

「此盜賊小僧め！お三どん、お三どん、新參の小僧がいけないやう、早く来て助けておくれやう。」

意地悪小僧は痛い體を擦りながら、大きな聲でお三どんを呼び立てた。肥つた強さうなお三どんは、駆けつけるが早いか、螺のやうな拳を擧げて、さんざオリヴァーを打ちのめす。そして擲りながらも、他人から同情されるやうな悲しい聲を振りしぼつて、「ひ、ひ、ひ、と、ご、ろ、し！」と呼び續ける、その一句一句に力がこもつて、オリヴァーは痛くつて仕方がない。そこ

朝日の影が屋根裏の明り窓から射し込むと一瞬間、オリヴァーは起き上つた。そして窓を明けた。四邊に氣を配つて、そつと見廻すと又ためらつて、オリヴァーは到頭後手に戸を引きしめると、街道へ飛び出した。

右を見、左を見、暫らくは何方を志して行つたものか、決め兼ねたが、小山の向ふを通つて行く車を見つけると、オリヴァーはそれと同じ道を行くことにした。野原をよこぎつて、辛とのことで知つた道に出た彼は、出来るだけ足早に歩いた。

その時、オリヴァーはまだ十歳の少年であつた。だがロンドンまでは七十哩の里程である。その上、全くの無銭旅行と云つても可い位、困難を極めた旅路である。人々の情にすがつて行くより外に仕方なかつた。



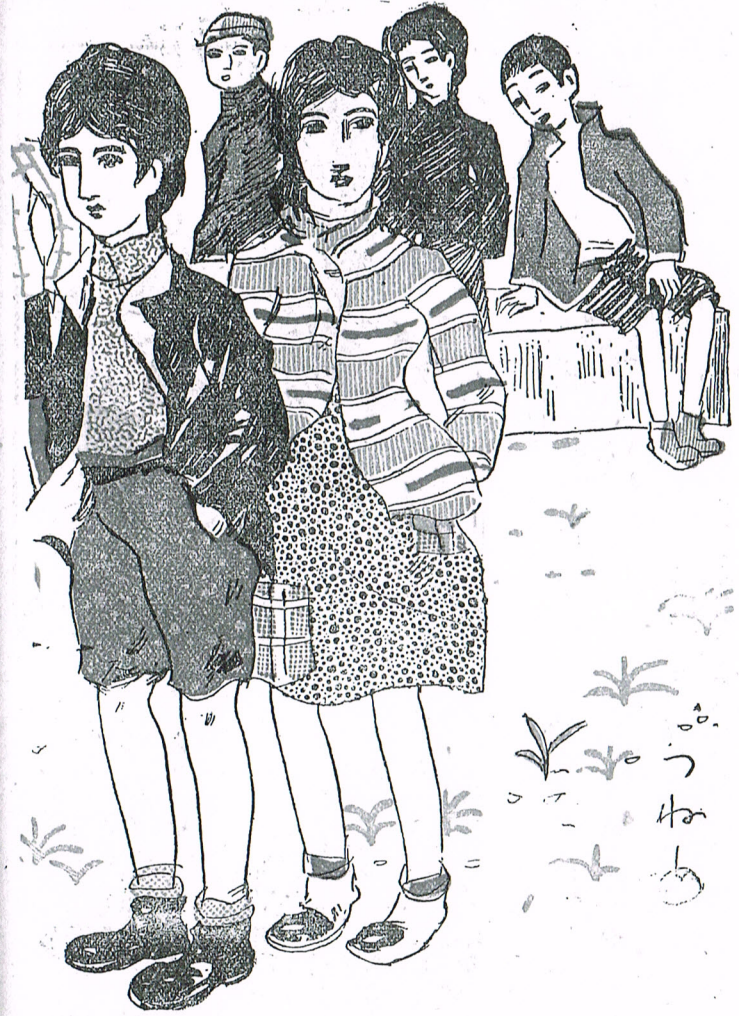
が、ウサン臭い乞食小僧だと睨まれたオリヴァーは、どの村でも邪慳に追拂はれて、一軒として心よく宿を貸してくれるやうな家はなかつた。

その苦しい旅の七日目の朝早くのことである。オリヴァーは疲れた足を引き摺りながら、ロンドン郊外の、バーネットといふ小さな町へ差かゝつた。家々の戸はとざされた儘、街道を往來ふものもなかつた。オリヴァーは痛い足を堪へ兼ねて、到頭倒れてしまつた。

そのうちに戸が開けられて、人通りも烈しくなつた。オリヴァーは暫くの間、じつとそこに坐つてゐた。

へ又物音を聞きつけた内儀さんが出て来て、一緒になつてオリヴァーを擲つた。そして終に到頭手取り足どり、三人が、り、汚い真暗な穴倉の中へ投げ込んだまゝ、上から戸をおろしてしまつた。

何時間かの後、オリヴァーは身を起した。そつと窓を明けると、如何にも寒い夜で、まるで世界の果かと思はれるほど、遙かの遠方に星がまた、いた。風はないけれど、真暗な樹立の影が死んだやうに地の上に落ちて居る。オリヴァーは又そつと窓を引き寄せた。明日こそ此處を逃げ出して、



廣い廣いロンドンの大都會へ行きませう！オリヴァーは斯う決心したのである。